

京都腎臓医会 会員紹介 そらまめライン

Vol 58 金子恵一先生 京都大学医学部附属病院 腎臓内科

執行部（学術） 京都PD地域連携WG



京都腎臓医会 2025/07/08発行
Kyoto Kidney Physicians Society
Since 2018



職場の写真です

京都大学医学部附属病院 腎臓内科の金子恵一と申します。京都腎臓医会の先生方には、平素より大変お世話になっております。このたび、正木先生より「自己紹介リレー」のバトンをいただきました。

出身は大阪府豊中市です。大学卒業後の初期研修は、1年

目を京都大学医学部附属病院、2年目を福井赤十字病院で行いました。当初から内科系への進路を考えてはいたものの、診療科までは決めておりませんでした。初期研修が腎臓内科で始まったことが、腎臓内科に関心を持つ大きなきっかけとなりました。当時の腎臓内科は、研修医の作成した入院サマリーをスタッフクラスの上級医が厳しく添削してくださる診療科で、非常に勉強になりました。電解質異常は面白い分野で、こちらでは『より理解を深める！ 体液電解質異常と輸液』など、優れた教科書に出会ったことで、読み進めるうちに腎臓内科への関心が高まり、進路を決めました。後期研修は京都医療センターで行い、その後、京都大学大学院に進学。学位取得後も京大病院で勤務を続ける機会に恵まれ、現在は透析室を担当しております。

初期研修中に思い描いていた以上に、腎臓内科の守備

範囲は広く、腎炎・ネフローゼ・電解質異常・透析管理といった専門分野に加え、腎不全患者さんにおける貧血やCKD-MBDの管理、さらには感染症などのcommon diseaseの対応まで求められます。また、シャント



大学院生の時にアメリカ腎臓学会に参加し、夜にMBA観戦をしました

手術や腹膜透析カテーテルの留置といった外科的手技も腎臓内科の業務に含まれています。腎臓内科医として10年以上を過ごしてきましたが、今でも知らないことに出会う機会が多く、この範囲の広さは腎臓内科の魅力だと感じております。

プライベートでは、5歳の長女と0歳の長男の子育てに忙殺される日々を送っています。子育ては本当に不思議な体験の連続で、子どもがすごい勢いで笑ったり泣いたりすると、自分は子どもの頃どうだったんだろうかと思い出そうとするのですが、遠い記憶でなかなか思い出せません。人生を

生き直しているように感じることがあります。私の実家には大きな本棚がありました。中学生以降、夏休みなど時間はあるけれど遊ぶお金がない時期には、父親の本棚にあった司馬遼太郎や山岡荘八の『徳川家康』（全26巻）などを読んで過ごしていました。本に囲まれた環境が好きです。現在の住まいは手狭で本棚を置いておりませんが、将来的には大きな本棚を置ける家に住み、子どもたちが自由に本に触れられるような環境を作れたらと、子どもの希望は聞かずに、ひそかに夢見ております。



長女と消防車に乗りました

座右の銘（私の好きな言葉）

論語より「不惑」

（子曰、吾十有五にして学に志し、三十にして立ち、四十にして惑わず、五十にして天命を知る、六十にして耳順い、七十にして心の欲する所に従えども、矩を踰えず。）

「不惑」という言葉を初めて知ったとき、40歳になる頃には自分もどれほどしっかりした人間になっているのだろうと、密かに期待していました。しかし実際に40歳を過ぎてみると、まだまだ「惑い」だらけです。現代は昔に比べて寿命も延びておりますので、40歳で到達しなくてもよいのではないかと思います。50歳くらいでその境地に近づけるよう、これからも精進してまいります。